コミュニティカフェはフェスを耕す場所

～カフェからうまれる、おいしい企画と新発想～

文＝石飛美郷

◀授産施設から“愛”のパン「白くまのパン屋さん」も飛び入り出店。メリケン粉で体中が白くなるところから名付けられた「白くまのパン屋さん」。知的障害者の皆さんがこころをこめてつくった素朴な味わいの“愛”のパン。あっという間に売り切れました。

フェスの開催が決まり、賛同者が増えてくる。となってくると、まず気軽に集まれる場が必要になりました。情報共有だったり、概要を説明したり、知らない人同士が初めて顔を合わせたり……。

そこで、人と人、人とフェスをつなげるゆるやかなネットワークづくりをめざす場として、コミュニティカフェを開催しました。場所は週末、保育のない「りんごの木子どもクラブ」。料理が好きな母たちの手を借り、子どもたちの手を借り、あまり無理せずに隔週土日のみをオープン・デイとしました。

同じ釜の飯を食う。長屋的に子育てする場。

私にとってのコミュニティカフェ。それは「同じ釜の飯を食う」ための場を提供すること。企画を練る場、交流する場……ありきではなく、同じものを食べる＝おいしいねと言いあえる場で、子どももいっしょに、わいわいがやがや、母同士が互いに見守りながら、気軽におしゃべりできる場から楽しい企画がうまれるという発想でした。

カフェはお昼に開催。ランチメニューとして、こどもみらいカレーやタコライス、フォカッチャサンド、生ハムとアボガドサンドなど、安くておいしい、家族みんなが楽しめるメニューを考えました。

子ども目線から発想する。人の思いが有機的につながる。

子どものイスに座って、子どもの居場所に寄り添ってみる。食べて飲んで気軽に話しあってみる。そんなカフェがあってこそ、そこからつながるパワーがうまれるはず。

徐々に人は集まり、情報共有の場だけでなく、そこからうまれる企画や、会場の装飾ともなった竹&裂き布ドリームキャッチャーなどの作品や看板の製作アトリエ、ホッとスペースの癒やし隊によるハンドマッサージのワークショップ、バルーンアートの練習会などなど。人の思いが形になるたくさんのコミュニケーションの場となりました。結果、開催までに10回ものコミュニティカフェを開催することになったのです。

料理好きな母たちの大いなる野望？イベント広場に屋台で出店。

さらに、イベント当日には、日々子育てでごはんづくりに奮闘しているお母さんたち同士が、「こどもみらい屋台」を出店する、という野心に満ちた企画もうまれました。フェス会場では、当日30人ものお母さんたちが、焼きそばやホットドック、ソフトドリンクなどを販売しました。この出店に際して、ご近所の酒屋の店主さんから、さらに人の輪が広がり、地域とのつながりもうまれたり、商店街の備品をお借りしたり、地元の名物スウィーツ「都筑まもる君焼き」も登場し、当日、お店はさまざまなコミュニケーションが生まれる場としても大盛況となりました。

そして、フェスが終了した半年後には、次回開催に向けたPRにと、再び「こどもみらい屋台」として、区民まつりにも出店。資金稼ぎとまではいきませんでしたが、楽しい試みとなりました。

甘くて香ばしくて大盛況だった都筑まもる君焼き。普段は、えだきん商店街(荏田南近隣センター)で酒屋を経営している内野敦さんが、地元の名物をつくりたいと交通安全マスコットでもある「都筑まもる君」の人形焼きを考案。そんな熱い思いの内野さんが焼く「都筑まもる君焼き」。フェス会場をほっこり笑顔にしてくれました。イベントのときにしか食べられない地元のレア・スウィーツです。

勢い余って、区民まつりにも「こどもみらい屋台」で出店。黒字にはほど遠く赤字をまぬがれた程度でしたが、楽しい試みとなりました。

「ホッとスペース」

がんばっているお母さんのための母の手づくりコミュニティブース

文＝小磯まゆみ

ちょっと立ち寄って
ちょっとひとりの時間を楽しんでみて
きっと、からだもこころも
ゆ〜るゆるん

こどもみらいフェスに、こんなキャッチコピーのコーナーがあった。それが「ホッとスペース」。日ごろ、子育てや家事に追われて、つかれているお母さんたちを、こどもみらいフェスのお母さんサポーターが、おしゃべりしながら、共感しながら癒していきましょ……という発想からはじまったこの企画。

当日は、ハンドマッサージ、リフレクソロジー、すいな整体、エンジェルタッチヒーリング、「お守ル」づくり、OSHOタロット、魔法の質問カード、オラクルカードなどと、スピリチュアルなものからオーガニックなものまで、お母さんたちの興味をひきそうな、多彩なラインナップ。

全体を取りまとめたのは、室井ボーマン里江子さん。

「フェス、楽しかったですよね。最初、石飛さんに頼まれて、どうしようかと思っていたら、増田さんが1日目のまとめ役をひきうけくれて……私、あれこれきっちり決めるのが苦手な性格なので、ぼんやりしていると「こうしたら、いいと思う」って、提案してくれる人がいて、「じゃあ、お願い」っていうと、ちゃんとやってくれるの。そんなふうに、それぞれが、やりたいこと、できることをやっていったから、何の心配もなかった」

ゆったりとした語り口調で、じつにおおらか。ボーマンさんをサポートした増田実紀さんも

「最初はお手伝いのつもりで打ち合わせに参加したのですが……でも、すごくやってよかったです。ハンドマッサージ隊のメンバーは、まったく施術経験がないのに「きっと、すごく癒されると思うの」と、お客さんの気持ちになって企画立案。そのポジティブさにびっくり（笑）！　自分以外ほかの人は、セミナーを受講したり、実際に営業していたりの経験者。その後、私も資格のある知り合いのお母さんをたよりに、教えてもらって、家族を実験台に猛特訓！　そして当日は大盛況！　これには、自分でも驚きました」

大きなイベントの経験は、もちろん誰も皆無。「バザー感覚だった」と、増田さん。

やらなければならいことを、こなすのではなく、やりたいことをイメージして、集まった仲間とワイワイ協力し、できることを形にする。十人十色。みんな違ってみんないい。だから、おもしろい。こんな経験が私たちを人として成長させるのだろう。フェスは不思議なチカラを持っている。

子どもたちによる
子どもたちのための、
子ども駄菓子屋さん
「こぶたのだっがしー」が開店

子どもたちが自ら考えてアイデアを出し、さまざまな議論を重ねながら出店した駄菓子屋さん「こぶたのだがっしー」。当日は、おおぜいの子どもが列をなして、ゲームをしたり、お菓子を買ったりと大繁盛でした。でも、ここまでいたるにはさまざまなドラマがあったようです。

0歳から12歳までの子どもたちが、ひとつ同じ屋根の下の一軒家にみーんな集まって大家族のように過ごすこともあるという、学童・保育ルームのどろんここぶたの子どもたち。いつもは、お庭でいっぱい泥んこ遊びしたり、いろんな公園に探険に行ったりなんですが、今回はみんなで駄菓子屋さんに挑戦しました。

駄菓子屋さんを出店してみて

私たちどろんここぶたでお店を開いていいことになって、それはそれは、わくわくしたスタートでした。「駄菓子屋さんなんておもしろそう！ しかも”こどもが主役”のお店をつくるなんて!!」

もちろん、お店屋さんをつくるのは初めてだったし、子どもたちみんなと話し合いもたくさんして、難しいこともいっぱいありました。でも、私が思っていたより、ずっとずっとみんなが一生懸命で喧嘩もひっくるめて最高に楽しい時間でした。そんな仲間といっしょに最後までがんばれたことが、何より嬉しかったです。

そしてひとつわかったこ とがあります。それは、難しそうでも、やったことがないことでも、とりあえずやってみること！ できないかも、って最初からあきらめないでやってみる。そうしたら絶対、新しい世界が広がるから。駄菓子屋さん『こぶたのだがっしー』を開くことができて、本当によかったです。

（代表、チャイルドマインダー　片岡恵美子）

＊

今回の駄菓子屋さんへの参加は、子どもの目線や店員らしくなっていく姿がとてもおもしろかったです。どんな店員さんだったらお店に行きたくなる？という質問を子どもたちにしてみました。

すぐにあがった答えは『笑顔!』

話はどんどん盛り上がって、乱暴に（商品を）渡すのはイヤ、とか、みんなに平等にする（友だちだけ特別扱いにしない）、嘘をつかない（詐欺のこと?!）、だらだらしない、ボソボソしゃべらない、などなど、大人は見られてるなー、と思いました。

当日の出来事でとくに印象に残ったのは的当てゲームに2歳くらいの小さな子が参加してくれたとき。的の前には未就学児、低学年、高学年の3つのラインがあったのですが、小さい子がまだボール投げられないのがわかると『もっと前からでいいよ!』と手の届く距離まで案内してあげていました。小さい子はペタペタボールを貼りつけて嬉しそうです。

もうひとつ、自分の担当時間が終わって店員だった子もお客さんになってゲームに参加していました。ゲームの景品が少なくなり『あと10人で終了です!』の声。10人の中に並んでいた、こぶたメンバーの子が『お客さんにゆずる〜』と列から抜けました。仕事が終わったら参加しようと楽しみにしていたのに、です。どちらもその子の判断です。お店やさんをやるうちに自然とお客さんに喜んでもらおう、という気持ちになったのだと思います。ちょっと感動する瞬間でした。

（チャイルドマインダー　比嘉香里）

こぶたのだがっしーすごろく

スタート！

1 駄菓子屋さんをオープンすることが決定！
テンション上がり2すすむ

ガーン！
低学年メンバーが全員「やりたくない」
1回休み **2**

高学年メンバー＆公園友達がたくさん集まる
やったー！
となりの人とハイタッチ **3**

会議スタート
全員と握手 **4**

多数決で「こぶたのだがっしー」に決定
バンザーイ3回 **5**

だがっしーでやるゲームを決めよう！
サイコロをふる
ストップ

みんなのやりたいゲームがバラバラ
動けない

小さい子でも参加できる的あてに決定！
次のマスへ **6**

係を決めてそれぞれの仕事をスタート！ **7**

ホームセンターに買い出しに行ったメンバーが暴走
4マス戻る **8**

的あてのつくり方がまったくわからず途方に暮れる
1回休み **9**

まじめに仕事するメンバーと、飽きて遊ぶメンバーとでケンカ勃発！
右となりの人とじゃんけん **10**

勝ち
差し入れのトウモロコシで仲直り
次のマスへ

負け
険悪ムードで進めない

ストップ

サイコロチャレンジ **11**
飽きてしまう子がどんどん増えて作業が進まず大人があせる

⚀ ⚅
先に仕事が終わった子が手伝ってくれた
3マスすすむ

⚂ ⚄
どんどん脱線して関係ない遊びで盛り上がる
1回休み

⚂ ⚅
的あてのお試し！ がいつまでも続く
2マス戻る

こぶたのスタッフTシャツ完成で、やるきUP
2マスすすむ **12**

やりたいことが増えていき、もう一度会議
全員で握手 **13**

突然キャラクター誕生！
「わたしピンクマンよ！」とかっこいいポーズを決める **14**

駄菓子の仕入れ。
目の前に大量の駄菓子が！
でも食べられない…
「おかしたべたーい」とさけぶ **15**

お菓子の値段を考えるがなかなか決まらない
困った顔をする **16**

ディスプレイを考えてすごいアイディアを思いついた！
全員に拍手してもらう **17**

値札をつくる。レジも手作り！
仕事がいっぱいで大変だ
サイコロをふって

⚀ ⚂ ⚃ ⚄
助っ人あらわる
3マスすすむ

⚃ ⚄
いやになって遊びだす
2マス戻る **18**

晴れますように！
全員で祈りのポーズ **19**

ゴール

「まつもデラックス座談会」

がんばったパパたちによる、ママに言えないココだけの反省会

「たまにはオレの背中も見てくれ」

りんごの木の保育者の「まつも」さんを座長・ファシリテーターに、りんごの木の子どもミーティングを模して「まつもデラックス座談会」を実施。会場は、りんごの木のパパたちにおなじみの家庭的な飲み屋さん。1時間、飲まずにしゃべったら、あとは忘年会という予定でしたが、お話は3時間を過ぎても止まらず、レコーダーの電池切れをもってして、ようやく終了しました。

会場近くの竹取公園に竹を切り出しに行った過酷な事前準備から、前日の設営や風景、開催時の夜間警備（夜警）など、お父さんならではの苦労話から始まりました

まつも：りんごでは、まず、何かあったら『どうだった?』という振り返りを聞くんです。何がどう楽しくて、どう思ったかというのをどんどん掘り下げていくんですよ。だから、自分で掘り下げてみて、どう楽しかったのか、でもどう大変だったのかと、話すというのはどうでしょう。じゃあ挙手でお願いします。

平岡：はーい！　では、それぞれ、何をやっていたのかなみたいなところから話しませんか。

三宅：僕は事前の竹取りがいちばん大変でしたね。

渡邉：僕も竹を切り出して運搬するところまでやったんですけど、僕は普段は造園士で専門家ですが、普通の人にとっては、とても過酷で、本当にキツかったと思いますよ。

三宅：レジャー気分でいっちゃったんですよ、僕。

渡邉：竹を切り出すには良い場所でした。都筑区は竹が有名ですごく多いんですけれど、良い所を見つけてうまく交渉されましたね。

まつも：竹は今回、何本切ったんですか?

渡邉：60本近く切ったと思います。

まつも：疲れたと思いますけど、何でそれをやりきれたのか。大変なことって、楽しいことがないとペイできないっていうか。

石飛：ちゃんとコミュニティカフェからおいしいランチ弁当が届いたじゃないですか。

まつも：それじゃあペイできないくらいの大変さだったと思いますね。

三宅：公園の斜面がきつくて、切った竹をズルズル引っ張って上まで上げるのがもう大変なんですよ。

藤川：私は、切るのだけ参加しました。笹の枝払いも自分のなかでコツをつかんできたときに、すごくほめていただいたんですよね。いいスジしてるって言われて。力ずくじゃなくて、こうスパーンと。

まつも：リンゴの子どもも上手にやりますよ。畑で枝を落すのにトントンと。

藤川：途中からちゃんと子どもたちが、のめり込む気持ちがわかったような気がして。すごく気持ちよかったです。

まつも：笹はその場では落さない?

渡邉：笹は上の広場まで持って行ってからさばきました。僕も結構本気で、仕事モードでやっていましたが、少人数なので大変でした。あれは重労働です。一日で全部やりきろうと思うと大変なんですが、なんとか終わりましたね。

石飛：段取り悪いことが最後の最後にあったけどね。

三宅：落とした笹を置いていた所を移動しろって言われたときね。

石飛：ちょうど終わったころに管理の方がいらっしゃって『このままじゃ困るなぁ』って言われて。竹が60本分の笹だから400本くらいあったのかな。笹を落すのも大変なんだけれど、それを縛って束にして、また移動しなきゃいけなかったんです。終わったって思ってたのに、そのひと言でダーっと冷や汗かきましたね。（笑）

まつも：その竹は切り終わった後、どこに置いていたんですか?

石飛：駅前の神社の境内です。イベントが終わった後は、全部片付けて、1／3はまんまるプレーパークに行って今も活躍中です。あとは半分くらいに切って竹林の土留めとして山に戻しました。最後の撤収は（今夜お休みの）西口さんと和田さんが行ったんだよね。あの暢気な西口さんと和田さんが行って、後から聞いたら『最後の竹を片付ける係になってしまって、もう大変な思いだった』って泣き言を言ってたね。

まつも：来年もやるって言ったらどうします?

三宅：文化祭的な感じがあって結構楽しかったですよ。

渡邉：僕はわかってるから行きますけど。作業の大変さを事前にわかっていたら、来る人が多分いなくなっちゃいますから。知らなくて逆に良かったかもしれません。

まつも：でも例えば来年やるとなったら、もうわかっちゃってるじゃないですか。報告書も読んだら……。

渡邉：次は段取りよくいけば大丈夫。

三宅：帰った後のシャワーがものすごく気持ちよかったです。

石飛：そう言ってもらえるとうれしいです。個人的にもすごく楽しかったし、すごい充実感もあったし、苦しかった事前の準備のなかでも3本の指に入る思い出だったなと思います。今日は欠席だけど、天野さんは、しゅうだい（長男）が『こどもみらいフェス』って書いたワイシャツを着てきて、そんな風に、子どもから、お父さんがんばって来て、なんて。あれを見てすごい涙出そうになったよ。アレはよかったよね。

まつも：やっぱり女の人には絶対無理な感じ?

平岡：そこはお父さんの腕の見せ所なんじゃないの?　そこはお母さんにゆずっちゃダメでしょう。そしたら活躍の場所なくなっちゃいますよ。

渡邉：多分仕切られちゃいますね。（笑）

まつも：気付いたらお父さんを縛っていたりして……。

なんと言っても男の中の男の仕事「夜警」

平岡：私は夜警ですよ。とにかく。フェスの話は、一年くらい前から石飛さんから『こんな構想で』みたいな話がありまして、お父さんたちは警備とか会場整備だとか、力仕事をやって下さいね、みたいな話はしていたのでわかっていたんですが、一週間前くらいに飲み会の席で、急に言われたんですよ。そのときは酔っぱらってますから、わかりました～、みたいな感じで返事したんですけれどね。実際に、どうすれば良いのかっていろいろ考えるわけです。それで丸二日間、夜警の人数や何時までとか考えて、シフトを組むのに一週間前ですよ。これはもう、相当人数をかけないといけない、あわてて計画を建ててメールしたんですよ。私の計算だとせめて7～8人いないと無理ですよと。

まつも：何で7～8人必要だと思ったの?

平岡：アーティストのモニュメントはありますし、センター北の駅前広場でしょ。酔っぱらいたちが、わーっと『何だコレは』みたいな感じでいたずらしに来たりしたら、ひとりじゃ抑えられないということでね。それを夜の6時に引き継いで、朝までやるのが2日間もあるわけでしょ。そうすると7～8人は絶対いるってなって。

まつも：で、人数はそろったの?

平岡：それで計画書を作って、シフト管理をやっている事務方のお母さんたちにメールをしたら『無理です。そこは3人でやることになっていますから、3人でやって下さい』と。私と藤川さんと大石さん3人で丸々二泊三日、徹夜で警備をやって下さいと。

まつも：怒ったりしなかったの?

平岡：もう、イベント一週間前ですから、お母さんたちも相当にテンパっていて、ぐちゃぐちゃになっているというのもわかってたし。ここで他のポジションから、お父さんたちを引き抜くっていうのは、これは大混乱を招いて、泣き出しちゃうんじゃないかと。そこでしょうがないからリーダーのお母さんに『任せて下さい、私たちがやりますから』って快く言いました。（泣）

まつも：かっこいい!

平岡：でもね、私は木曜日の晩から接待ゴルフに行ってたんで、金曜日はゴルフ場から直行で行きました。もうすでに、ほとんど寝てないんですよ（笑）。それで金曜日も徹夜するでしょ。それで家に帰って仮眠させてもらえるのかと思ったら、ウチの嫁さんも土日の日中は、フェスのシフトがあるので、その間、子どもたちをよろしくって……。

まつも：奥さんもイベントで何か役割を持ってるわけですね。

平岡：そうです。そこで、何だよ～、みたいなことを言うのも情けないから、よーし、わかった。子どもたちはまかせろ!　みたいな感じで日中は子どもたちとフェスに行って、それで夜になったらまた夜警よろしく、みたいな感じで……本当にあのときは、期間中、ほとんど寝ずに、もうヘロヘロになりましたね。

まつも：またやりますかって、言われたらどうしますか。

平岡：ほかに協力してくれるお父さんとかがいないと、一人じゃもうもう無理ですね。

まつも：実際、夜警の間はトラブルはなかったんですか。

参加者

- **まつも@佐藤清美**
  りんごの木子どもクラブ保育者
- **平岡さん**
  1年生・年小。りんごの木父兄ゴルフ部次期部長
- **杉本さん**
  年長。運動会の大人のリレーで靭帯切っちゃった一級建築士
- **渡邉さん**
  2女・1男（2年生）。造園業。お母さんは保育士
- **三宅さん**
  2年生・年長。電気関係営業マン。ゴルフ部部長。お母さんは看護師
- **増田さん**
  1年生・年小。金融マン。家にはテレビを置かない主義
- **藤川さん**
  3年生・1年生。中国赴任から戻った商社マン
- **石飛さん**
  2年生・1年生・年小。イベント好きの実行委員

編集

- **滝沢（タッキー）さん**
  5年生・6歳・5歳。山岳雑誌『PEAKS』に「やまいく」として、親子登山の記事を3年にわたって連載する育メン編集者。

平岡：酔っぱらいが来たらどうしようとかは、ちゃんと考えたんですよ。普通の格好だと警備にならないので、反射ベストを着て腕章を付けて警備員風に見せかけて立っていたら、広場には近づいて来なかったんですが、駅前で缶ビールを飲んでずっと騒いでるんです。それと塾帰りの中高生が、竹タワーの上に何十人と乗って、夜に鬼ごっこをやっていたりだとか。

まつも：それでどうしたんですか？　それは静止したんですか。

平岡：はじめは見ていたんですが、そっちに向かって行ったら、みんなヤバい、みたいな感じでクモの子を散らすように、わーっといなくなりました。

まつも：警察に通報されたという話も聞きましたが、なんで通報されたんですか。

平岡：何かあるといけないし、雨も降るといけないということで、会場に車を置いていたら『何でこんな所に車を置いているんですか』みたいな感じで。ちゃんと許可証は取ってるんですけどね。でも、しつこく警察が言ってきて、付近の住民から苦情が来ていますからみたいな感じで。

三宅：そんなにもめてないですよ。思いのほか、普通の会話をしていました。別に何があったというわけではなくて、『何をやってるんですか』って言われて『こういうことをやってるんです』って言って『大変ですね』って感じで、そんな会話をしただけです。

まつも：もめてないじゃないですか!?　交代で順番に寝るとかはしなかったんですか？

平岡：初日はよくわからなかったので、とりあえずは2~3時くらいまでは起きていましたね。2日目はもう要領がわかったので、終電が終わったらちょっと落ち着けました。

まつも：結局は交代で少しは寝たんですね。

三宅：でも、深夜、大雨になったんですよ。平岡さんが車で寝てる間に、大石さんは土砂降りにあっちゃって、平岡さんに電話するんだけど、ぜんぜん起きないって。大変なことになってたみたいですよ。

まつも：いちばんがんばってたのは、大石さんじゃないですか（笑）。お酒は一滴も入らなかったんですか？

平岡：お父さんたちは、夜警なんて言って、どうせ飲んだくれてるんでしょう、みたいなことは思われたくなかったから……。でも、初日はちょっと飲んだかな、二日目は西口さんがどっさり酒を持ってきちゃったから……。

まつも：飲んでたんじゃないですか！　三宅さんは途中で帰ったんでしたっけ。

三宅：嫁さんが仕事だから、子どもの面倒見なくちゃいけなくて8時くらいには帰ったんです。何か楽しそうだなぁ、と後ろ髪引かれながら。

石飛：平岡さんは、自分の仕事のつながりを活かして、カラーコーンを持って来てくれたんですよね。

平岡：数週間前から取引先の社長に電話して『こういう一大イベントがあるから必ず持って来てくれよ』っていて、厚木からカラーコーンを持って来てもらった。

まつも：それは仕事の間柄で頼むんですよね？　本来は。

平岡：イベントの趣旨を話したら、意気に感じてもらって『仕事終わったらすぐに持って行きますから』って言ってくれて。

まつも：ある意味、職権乱用ですよね。

平岡：みなさんといっしょで、自分の仕事など、何が持ち味で、どこでだったら、役に立つかっていうところを考えてね。

まつも：どうしてそこまでのめり込んで熱くなれるんですか？

平岡：サラリーマンとか社会人は、苦労すればするほど達成感を味わえるっているのがわかってるじゃない。この二日間、丸々寝ないでやることが、自分にとっての役割だし、思い出にもなるし、すごい達成感があると思ったんですよ。

まつも：それは石飛さんのためか、園のためか、自分のためとか色々ひっくるめたら？

平岡：そんなの石飛さんのためにやるわけないでしょ。それはやっぱり自分のために、自分がおもしろいからでしょ。何か楽しそうじゃんみたいな。

まつも：人のためにやってあげようと思うと、『あんなにやってやったのに』みたいになるじゃないですか。ちょっと嫌だなと思うことが、人のせいになるじゃないですか。でも自分のためだと、良いことも、悪いことも全部自分に返って来ますしね。それが自分のためだって言ってもらえると、すごいうれしいですよね。

平岡：この半年間、ずっと思ってたんですよ。いま、ようやく吐き出すことができました。

滝沢：それは良かったですね。聞いてくれよ、俺の話を、と。こういう話を聞きたかったですね。

まつも：でもこれ報告書に書かなかったら全員に伝わらないですよね。すべてのお母さんたちにも聞かせたいですね。

つづいて話題は、フェスをやったことを通じての家庭観、子育て感。ひいては子育てを取り巻く社会環境の話題まで、話は尽きません

まつも：増田さんはどういう役目だったんですか。

増田：私は、家内が癒し隊っていうマッサージみたいなのをやっていたので、それをじゃましちゃいけない。だから僕も積極的にお父さん側に参加したいんですけど、家内が主体的に関わっているときは、僕は子どもの面倒を見るとか、サポート役に回らないといけない。それは絶対不可侵条約なので。もうちょっと子どもが手がかからなくなれば二人ともお手伝いができるようになると思うんですけど。

平岡：でもやっぱり基本は母なので、そこのフォローは、お父さんがやるっていうのが大事でしょうね。

増田：ウチのかみさんは、いわゆる専業主婦なわけですね。専業主婦が輝ける場っていうのはあまりなくて、だからこういうイベントとか何かがあると、本人はすごい楽しくて、すごいキラキラしてるんです。

まつも：キラキラしている奥様を見て、いかがですか？

増田：キラキラしているかみさんを見て、良いなぁというのは当然なんですが、それよりも重要なことは、キラキラタイムが中途半端に終わると、その溜まった鬱憤が僕に来るんですよね。だから、いっそのこと、気持ちよくやりきってもらった方がいいんです。

まつも：杉本さんは当日何をやってたの？

杉本：自分は前日のテントの設営を担当してました。だからみなさんといっしょにやっているわけではないんです。

石飛：みなさんは普通に仕事があるから、金曜日は男手が少なくて、それで杉本さんにはすごく助かったんです。

杉本：設営で良かったのは、形になっていく所が見られたところですね。最初どういう物がつくられるかっていうのがまったくわかってなくて、とりあえず竹を運びましょうって、ティピを建て始めたんですけれど、考えている物よりずっと背丈が高いんですよね。スタッフの方が指示してくれながら手伝ったんですけど、やってるときに保育園から帰って来る園児とか、近所の子どもとかが寄って来て、わーって見上げたりするのを見ていると、何かすごく良いなって思いましたね。あれがシンボルだったじゃないですか。アレを組み立てるのを手伝えたっていうのはとても良かったと思いますね。

滝沢：会期中はフェスに来たんですか。

杉本：当日は仕事で行けなくて、だから実際にどういう風に使われたかというのは、後で動画とかを見て確認するという感じでしたね。

平岡：じゃあ本当に設営の準備だけだったんですか。それはちょっと残念でしたね。

杉本：そうですね。実際ちょっと様子を見てみたかったっていうのはありますね。

まつも：お父さんがつくってるところを子どもが見るって言うのは大事だと思うんですよ。「これパパがつくったんだぞ」って、そういうのって誇りに思うはずなんです。すごいうれしいと思う。だから、なるべく見せてあげたいなって思います。

平岡：そうだなぁ。うちの子なんて、俺が夜警したなんて、よくわかってないだろうからな。何でお父さん朝に帰って来たの？　くらいで。

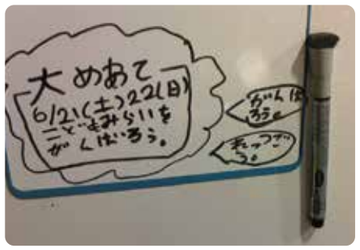
まつも：それで会話が弾んで『お父さんが何で朝に帰って来たかというとね』って。『あそこに泊まってたんだぞ』って。

平岡：それは言わなかったなぁ。

まつも：本当にそうやってお父さんが働いたって言うのが大事。いなかったらできなかったじゃないですか。それはこどもにとって、すごい誇りだと思います。ウチのお父さんが！　っていうのが。

平岡：ウチのたくみがね、スタッフ気取りだったわけですよ。何でかって言うと、お母さんたちといっしょにチラシ配りを手伝ったら、スタッフパスをもらったんだよって。得意げな顔をしていたんですよ。そうすると、ただ単にそこに遊びに行くんじゃなくて、そこの役割を与えることによって、もう一段上のレベルに上がってモチベーションが上がって、彼のなかで化学反応が起きたりする。

石飛：子どものモチベーションって案外あなどれないですよ。例えば、ウチの冷蔵庫に一週間前に張り出されてた、みちかからのメッセージ。『大めあて、6月21、22こどもみらいをがんばろう。れっつごう』これは非常にうれしかったですね。こういう風に彼女たちのなかでも、感じて、思ってくれていたんだって。最後の踏ん張り時に、すごく頼もしかったですね。



子どもから冷蔵庫のマグネットにこんなカキコミが……

石飛：ところで、開催がせまった最後の最後に、誰かのお母さんが『ところで子どもたちは誰が見てくれるんですか？』って質問が出た。そういう役割分担までできてれば良かったのかもしれないけど、「えっ」と蒼くなって……。ふと、アイデアが浮かんだの。目印をつけようって。心配な方は、肩に赤いリボンを付けて、お互いで、あるいは子ども同士が見守ることにしましょう、という風に全員にメール送ったんです。こっちで準備しますとも言わなかったけど、十中八九の人が、リボンを付けて来てたね。そうなるとみんな安心していた感じがあったね。

お父さんたちのコミュニティ

滝沢：あのちょっと聞いても良いですか。お母さん方は、保育園や学校など、その学年の代で集まって何かやったり、横のつながりも含めて、コミュニティのようなものができるじゃないですか。りんごでは、お父さんたちのこういうコミュニティっていうのは、珍しくないんですか？

まつも：お父さんだけの会のようなものは、ここ5年くらいで、石飛さんがやり始めたことなんです。それまではなかった。

滝沢：お父さんって、何か役割を与えられないと、お母さんたちのように、横のつながりって持てないと思うんですけど。やはり珍しいんですね。

まつも：珍しいというより新しい。新しいけれど、お母さんたちみたいに、こういうコミュ

ニティが持てるんだっていうのを新たに感じました。男の人って『いや、いいよっていって、女の所には出ない。子どもの場所には出ない』とか『子育てはお前に任せたんだからそれでいいよ』ってなりがちかなって思ってたんですけど、こんなに友達みたいになれるんだって思った。仕事の話もしないじゃないですか。誰が何をやっているかというのも、わからないし。

平岡：このお父さんの集まりの良い所は、仕事の利害関係がないんだよね。それが良いんだよね。

まつも：お話会にお父さんが来たり、バーベキューをしようって言うときにお父さんが来たり、送り迎えにお父さんが来たり。運動会は昔から、お父さんが張りきるというのはありました。でも、それで『運動会は楽しかったね。じゃあ次は集まりましょうか』って所まではいかなかったですからね。

平岡：でも、それはお父さんたちのなかにも『あの中に入ってやりたいんだ』っていうお父さんもいるし、『そんなのは俺はもういいよ』っていうお父さんもいるんですよね。

滝沢：来年以降このイベントを継続的に続けて行くんだったら、やっぱり代は変われど、お父さんたちの力って必要なわけじゃないですか。

石飛：やっぱり人、それぞれだなって思います。『絶対に人前はダメなんです彼は』みたいなタイプのパパもいるし、『積極的に遠足はついて行くけど、ここには絶対来ないんだな』っていう人もいる。ただその極端だったらわかりやすいんだけど、その中間層がいるわけじゃない。そういう人には、アプローチしたいなっていうのはある。嫌われ役でもと思ってそういう人にもメールをするんですよね。返事はないけど、それはしょうがない

平岡：またそこでひとつ大きな問題があって、仲良くなりすぎて周りが入って来づらいみたいなのがね。そこがね、今年ちょっと失敗したね。ゴルフ部って名前をつけちゃったから、『俺ゴルフやらないから』とかね。

三宅：1回白紙に戻した方が良いかもしれませんね。

平岡：だから来期は、アウトドア部っていうのにしよう。

まつも：だから部はつくっちゃダメだって。出会うきっかけは運動会ですよね。そこで募集すればね。

石飛：だから運動会の後にね、「愛子さんとお父さんのお話会」っていうのをやってるわけ。出会うきっかけもそうだし、園を知るきっかけも、ちょっと興味深くなるきっかけは、やっぱり運動会かなって。

三宅：飲み会から始めるのが良いんじゃないですか。

石飛：こどもみらいフェスを手伝おう！っていう手紙を出せば良いのかな？

平岡：フェスに関わるって、ハードルが高いんじゃないのかなあって。関わるからには楽しみたいというか、何か目的を見つけたいとかあると思うんですけどね。それをフェスという場で見つけるのは難しいんじゃないかと思うんですよね。だからお父さんたちからしてみれば、もっと気軽に参加できるような場があると良いと思う。

渡邉：俺もそうだったんですけど、素人がフェスを見ると『何か大変なことになって来たぞ』って感じるんですね。そこに参加するのはちょっと勇気がいるんですね。自分は結構頭で考えちゃう所もあるので、そこで自分が何の役に立つのかとかを考えちゃうんですよ。

藤川：最初に考えたとき別に何か物をつくれるとか、すごい話術があるとかそういうことはなかったんですけど、このイベントに何かちょっとでも参加したいなって思いがあったんです。それでどうしようって思ったときに警備の話がきて、『時間を提供すれば良いんだ。これもありなんだ』っていうのが救いで、じゃあやりますっていう感覚だったんです。だから時間を提供することも参加する意義になるとわかった。

杉本：自分も最後の最後まで迷ってて、石飛さんからのメールで、前日の設営のスタッフが足りないみたいなことが回って来たので、そこだったら自分も行けるかなと思って参加したんです。

増田：上の子の小学校にお父さんの会っていうのがあるんです。それで僕は良いことあるかなと思って参加して、Tシャツもみんなでつくったんですけれど、普段家でゆっくりできないお父さん同士がただ集まって酒を飲みましょうみたいなことが多いんですね。そこに子どもはいないわけです。そこに子どもがまったく入って来られない。でもフェスっていうのは開いたらすごい物なのかなって感じはするんですけど、子どもが楽しむ場があって、親も楽しんでる。親も子も楽しめるこっちのほうがいいって思うんです。小学校の親父同士の飲み会よりは、僕は子どもといっしょにいる時間のほうが楽しい。

まつも：お父さんたちの、手伝い方や関わり方にもいろいろあって、もちろん準備や設営だったり、夜警だったりって。でも最終的には『イベントを楽しみに来て下さい』っていうので全然OKだと思うんですよ。だから『仕事があります。そういうことが好きじゃないけど、当日は子どもといっしょに遊びに行きます』っていう関わり方でも充分な気がします。

＊

さて、今、ちょうど3時間も話してるんです。そろそろ終電もあるので、ここでいったん終了させていただきます。まつもさん、ここからは肩の力を抜いて、思い切り飲んでいただいてけっこうです。みなさま本当にお疲れさまでした。あとは心ゆくまで、フリートークでやっちゃって下さい。

今日だけで終わらない！ こどもみらいフェス は続くよどこまでも…

写真コラージュ ＝ 奥村佐知子

フェスで感じた「あんなこと、こんなこと」分かち合いたい「子育ての苦労ばなし」「地域ぐるみの子育て」やらせてみたい「外あそび」……ピンときたいろんなことがフェスだけでは終わらせることなく、今も継続した企画としてつながっているのです。

にはでも雨は子たも子ラのら

こどもみらいフェスは、梅雨空にも関わらず、子どもたちの声が響き渡り大盛況の二日間となりました。竹のタワーや、フラッグ、流木のオブジェに、ワークショップ。子どもたちが安心してはじける姿を、いつもより少し余裕を持って見守ることができたのではないでしょうか。

楽しいイベントが終わってしまっても、子育ては日々続いています。毎日の子育ては、自然といっしょ。晴れの日もあれば、雨の日も、ときには、嵐やカミナリ？もあったりして。

子どものくったくのない笑顔が大好きで、その成長をゆっくり見守りたいと頭ではわかっていても、ほかの子と比べて不安に思ったり、自分の都合でついせかしてしまうこと、それが当たり前になってしまっていたり、逆に、がみがみ言いすぎちゃったなと、口うるささを反省してみたり。子育ては試行錯誤の連続です。とはいえ、できるだけ、にこにこ晴れの日が増えたらいいなというのは共通の想いでしょう。

そんな毎日の子育てを少しでも楽しく、楽に、ゆったりと過ごしたい……でも、ひとりだったら煮詰まっちゃう……、そんなあなたに、地域で同じ想いをもって活動している場をご提供しているのも、こどもみらいフェスの活動の一環です。

ここでは、誰もが気軽に参加できる6つの「つづくよ企画」をご紹介します。ぜひ、足を運んでみてください。

子連れママの夕方しゃべり場

花金ままるる

開催：第四金曜日 18:00 ～ 21:00
場所：一時保育さんぽ （えだきん商店街内）
住所：横浜市都筑区荏田南5-8-13　1階
電話：045-532-9960 / 070-6481-9663（担当：西田）

週末の夕どき、子連れママたちが商店街の一角でほんわりと電気がついているままるるへと続々集まってきます。月に一度のままるるの日です。ここでは、初めての人も、常連さんも、和気あいあいとおしゃべりしながら夕飯を食べたりして過ごします。ママたちがおしゃべりに花を咲かせている間、子どもたちは、おもちゃを出して思い思いの遊びを展開。木のぬくもりのある温かな部屋で、子ども同士遊んでいてくれるから、ママたちも少しゆっくり自分の時間を持つことができます。なんだかたまってしまった「もやもや」を吐き出すもよし、とりとめない話をつづけてもよし、話す人も聞く人も、肩の力を抜いてお茶のんで、ゆっくり温かく過ぎていく週末の夜。子どもといっしょだけど、ママも一人の人としての時間をのんびり持てるそんなたまり場です。

長屋的な子育ての場

子育てカフェりんご

開催：月1回土曜日 10：00～13：00
場所：りんごの木子どもクラブ　茅ヶ崎南教室
住所：横浜市都筑区茅ケ崎南5-2-5
電話：045-945-1023

子育てカフェりんごは大人も子どもも、思い思いの時間を過ごすような「長屋的な子育ての場」をコンセプトに月1回土曜日に開催しています。

おもいっきり遊んだり、みんなでお弁当を食べたり、紙芝居を読んでもらったり。未就園児を持つ家族が対象ですが、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃんお姉ちゃんもいっしょにわいわいと遊んでいます。

大人たちは、子どもを見守りながらも、おしゃべりに花を咲かせ、ときには手芸や書道を楽しむなど、ゆったりと時間を過ごします。子どもたちは、そんな大人のそばで安心して遊んでいます。

りんごの木の保育者も常駐しているので、何気ない会話から子育ての相談に発展することも。大人も子どもも、互いに心地よい距離感で、ゆっくりと楽しい時間が過ぎていきます。

森のようちえん

もあなフェスティバル

開催：不定期
場所：NPO法人もあなキッズ自然楽校
住所：横浜市都筑区中川中央1-38-11
電話：045-342-8389

もあなフェスは、「学童保育もあなのいえ」の子どもたちが企画したフェスティバル。子どもたちがテーマから考え、やりたいことを実現するために、準備をしたり練習をしたり。大人はそんな過程を温かく見守ってきました。大きな虹の看板をはじめ、そこここに、子どもたちが書いた手書きの看板が。自分たちで考えて飾りつけをしたお部屋の中は、まるで秘密基地のよう。そこには、子どもたちの楽しそうな呼び込みの声が響き、壮大な遊びに招待された気分です。「子どもにはできない」なんて、それは大人の思い込みだと改めて感じるフェスティバルです。「学童保育もあなのいえ」ではこれからも、地域に向けて子どもたち目線での発信を続けていきます。

子どもに関わる人の対話と交流の場

りんごの木 サタデーナイト

開催：土曜日（不定期）18：00 ～ 21：00
場所：りんごの木子どもクラブ　茅ヶ崎南教室
住所：横浜市都筑区茅ケ崎南5-2-5
電話：045-941-0850（見花山教室）

りんごの木サタデーナイトは、おいしいお料理と飲み物（アルコールも）でリラックスした雰囲気のなかで、子どもに関わる人同士が「ご縁」を紡ぐコミュニティです。

教育、保育だけでなく、音楽、アート、放送、プレイパーク、写真、絵本、地域コミュニティなど、毎回、各分野から多様なゲストをお招きして、職域やジャンルを越えた人々が、子どもと子どもの未来について、にぎやかに心ゆくまで本音で語り合える場です。

保育ルーム・学童保育

どろんここぶた 親子イベント

開催日：不定期
場所：保育ルーム・学童保育 どろんここぶた
住所：横浜市都筑区牛久保2-3-2
電話：045-914-6700

ちいさい子からおおきい小学生までが集まる、平屋の一戸建『どろんここぶた』では、親子が共に豊かな時間を過ごすためのイベントを行なっています。

子どもに便乗して、大人もいっしょに遊んじゃいましょう！　というコンセプトで、未就園児とパパママとの『パステルアートセラピー親子体験会』や、小学生の子とパパママとの本気勝負！『逃走中』など、親子で大いに遊び、大笑いしたり、ホッとしたりする場をつくっています。無心で遊んで楽しんで、いつしか忘れていた「子ども心」を、私たち大人が取りもどしていくことで、「子育ての時間」をもっと楽しく、もっと子どもに近づいて、「子どもと育ちあう時間」に変えていく―「どろんここぶた」のイベントには、そのきっかけがたくさんちりばめられています。開催は不定期ですが、親子遠足やお店屋さんごっこの日など、今後も子どもたち主体の親子イベントを予定しています。次回イベント情報は「どこんここぶた」HPをご覧ください。

都筑冒険遊び場

まんまるプレイパーク

開催：毎週月曜・火曜、第1・3・5水曜、第2・4日曜 11:00 ～ 17:00
場所：鴨池公園まんまる広場
住所：横浜市都筑区荏田東3-2
電話：070-6481-9663（担当：西田）

公園と公園をつなぐ遊歩道沿い、ぽっかりと開けた明るい場所にまんまるプレイパークはあります。木には木製のブランコが揺れ、子どもたちは木に登ったり、子犬みたいに落ち葉の中を転げまわっていたり。まわりは住宅地にもかかわらず、ここは、まるでどこかの森の中。まんまるへやってきて、あっという間に自然と同化する子どもたちの姿に、子どもって、とても自然に近い！　と、はたと気が付き、大人はいつものルーチンワークから抜け出してひと息つきながら、子どものころの遊びに想いを馳せる。異年齢の子どもたちが群れて遊ぶ光景はいつ以来だろう？ 土があって、草木があって、水があって、火があって、風が吹いたり、ぽかぽかと暖かったり。子どもがいて、大人がいて、とことん遊びがあって、ときどきおせっかいがある。まんまるプレイパークは、子どもだけでなく、大人にとっても、冒険遊び場。子どもたちといっしょに、草木の匂いを、土を踏みしめる感覚を、遊びの楽しさを、思い出せる場所です。

【特別寄稿】

徹底解剖 ケロポンズのひ・み・つ

文＝藍野裕之

未認可保育施設りんごの木子どもクラブと深い縁で結ばれているケロポンズは、増田裕子と平田明子のユニットだ。増田の愛称がケロちゃんで平田がポンちゃん。増田は八〇年代の半ばの四年間りんごの木で音楽教室を担当していた。また平田は九〇年代の六年間りんごの木の保育担当だった。

柴田愛子のもとには、彼女の自由な保育精神を慕い、子どもたちの世界に響く才能を持った若い男女が時代時代に集い巣立っていった。そのなかにケロポンズのふたりもいた。

結成は一九九九年六月で、活動は一五年を過ぎた。歌と演奏、それに合わせた色とりどりの衣装、踊り、さらにはオリジナル二次元アートで物語を語りつつ歌を織り交ぜるパネルシアター……。そのパフォーマンスはファニーであり、メルヘンであり、ヒューマニティあふれる。そして、シンプルなメロディに優しい言葉を乗せた歌の数々は、しっとり聴かせる。

人はケロポンズを子ども向けユニットといいう。楽曲は遊び歌といわれることが多い。しかし、わたしには、そうは思えない。たとえば手塚治虫の少年少女向け漫画が世代を越えて支持されたように、彼女たちのパフォーマンスは、子どもたちを喜ばせながら、大人たちの胸も打つ。文学には児童文学がある。ならばケロポンズは児童音楽か？　いや、どうも堅苦しい。Toy Box Musicなんてジャンルはないだろうが、彼女たちのライブはまるで玩具箱をひっくり返したような感じだ。上質であれば玩具であっても、大人の心さえ奪うのも当然である。

もちろん、入り口は子どもたちだ。わたしには大学生の娘と息子がいて、奴らがいなかったらケロポンズとの接点はなかったと思う。子どもたちが小さかった頃、すでにケロポンズは子ども世界では知る人ぞ知る存在で、どこかで覚えた楽曲を聴かされ、踊りを見せられたのだ。「いっしょに」と奴らがいうので、歌と踊りを覚えた。すると、昭和三十年代生まれのわたしには、体験したことのない子ども世界があり、感心させられてしまったのである。教育、保育という複雑さではなく、オリジナルな楽曲が醸し出す自由がそこにあったのだ。

今回、初めてケロポンズのふたりに会った。わたしとしては、自身の子育て時代を振り返る時間でもあった。

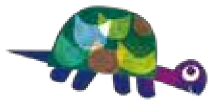
「もちろん子どもは大好きですよ、でも、わざと喜ばせようとか、無理に笑わせようとかはしていないつもりなんです。子どもに媚びないっていうのを戒めにしています。子どもにはわからないギャグも言いますし……大人たちが笑ってるなかにいるのが楽しいっていうのも、子どもたちにはあると思うんです」

という増田は一九六一年生まれである。一方の平田は六八年の生まれだ。ユニットが産声を上げようというとき、増田は学生時代に観たケンブリッジ・バスガーズを思い浮かべた。ケンブリッジ大学出身のふたりの男性音楽家が、アコーディオンとフルート、クラリネット、リコーダーといった吹奏楽器を巧みに組み合わせ、クラシックを演奏する大道芸的なパフォーマンスを見せるユニットだ。現在はクラシック・バスガーズに遺伝子が引き継がれている。

それを思って増田は平田に聞いた。

「ポンちゃん、鼻で笛吹ける?」

突拍子もない質問に、平田は何をてらうこともなく「吹けるかもしれない」と答え、すぐさまやって見せた。その後は、いつもそんな掛け合い漫才のような感じで、即興を軸にして楽曲や踊りを生んでいった。



「エビカニクス」は、彼女たちの代表的な楽曲だ。増田がオレンジ一色、平田が赤一色の衣装に身を包み、両手には大きなハサミをつけて歌い、踊り、コンサートでは客席を大興奮させる。エビとカニのエアロビクスというコミカルな創作ダンスもさることながら、曲調は上質なロックである。ケロポンズの楽曲は音楽的な底深さと幅広さに支えられているのだ。そこに思いいたると、自然に疑問がわいてくる。いったい、彼女たちはどんな人生を歩んできたのだろうか。

@

増田は東京で生まれ千葉県で育ちながら、母の勧めで幼少の頃からクラシック・ピアノを習っていた。小学校では器楽クラブ、中学、高校では合唱部と正統派だが、高校時代にガールズ・バンドを組んでキーボードを弾いた。

「クラシックも好きでしたが、ニューミュージックも好きで、矢野顕子とか、八神純子とか、ピアノを弾いて歌うアーティスト。オフコースもよく聴いてました。でも七〇年代に……四つ上の兄が隣の部屋でプログレッシブ・ロックを聴いていたんです。うるさくてやだったんだけど、気がついた自分のなかにものすごく入っていたんですね。だから戸川純みたいな曲も作りたいと思うし、やっぱり兄の影響は大きかった。自分だけじゃこうはならなかったと思います」

やがて増田は東京の国立音楽大学に進学する。この学校を選んだ理由は音楽大学で唯一、幼児教育科があったからだった。そして、入学すると後に国立音楽大学の副学長になる幼児教育の改革推進者、繁下和雄と出会い、彼のもとで音楽遊び研究会に属しながら、バンド活動も続けていった。いまのケロポンズに欠かせないパフォーマンスであるパネルシアターは、増田が大学時代に出会ったのが起源で、卒業論文のテーマにもなり、初めてオリジナルを製作したという。

一方の平田は長野県で生まれ広島県で育った。いまの体型からは想像しにくいが（失礼）、小さい頃は体操が得意で変わり者な農学者だった父親は、なかば本気で「行く末はオリンピック選手だ」といっていたという。「初めて買ったレコードは石野真子の『春ラララ』ですけど、母がさだまさしが好きで、家のなかにいつも流れていたんです。思春期は、ユニコーンと佐野元春、スネークマンショーなど、何でも聴いていて、高校時代はバンドをやってました。ドラムです。ちょっとだけ」

そういうが平田は多芸だ。ピアノ、キーボード、ウクレレ、リコーダーをこなす。中学ではバレー部で、高校では天文部、写真部、料理研究会を掛け持ちし、エネルギッシュに日々を過ごした。そして安田女子大学に進学。専攻は児童教育学科だ。レクリエーション同好会を根城にし、学外サークルにも加わって子どもたちを集め、キャンプ、歌作りセミナー、コンサートなど、さまざまなイベントを企画していったのだ。

「音楽も好きでしたが、絵本やお話も好きで、岡田淳の『放課後の時間』が大好きでした」

こうした別々の歩みが絡み合うのは一九八九年のことである。増田が参加していたバンドと出会ったのだ。ただ、増田は大学卒業後すぐに音楽活動を始めたわけではなかった。

「バンドをやるか幼稚園の先生になるか、すごく悩んだんです。で、やっぱり子どものことをやろうと思って幼稚園の先生になりました。でも、わたしにとっては挫折の四年間でした。子どもたちと遊ぶことは得意だったんですけど、静かに子どもたちにお話をしたり、クラスをまとめたりすることが苦手でした」

そうやって悩んでいた増田は、あるとき幼稚園教諭や保育士を対象にしたセミナーに参加した。このとき遊びの講師が、中川ひろたかと福尾野歩という男ふたりのユニット、ノボ&ピーマンだった。増田はふたりとはすでに学生時代に出会っていたが、あらためて観たパフォーマンスに打ちのめされた。「これでいいんだ。自由でいいんだ」と強く感じたという。

セミナー終了後、増田は大学時代から親しかった友人とともに打ち上げへの参加を許された。そこで、宴会芸として遊び歌を披露することに。「面白い。いっしょにバンドやろう」と乗ったのは中川だ。こうして一九八七年に中川、福尾、増田のバンド、トラや帽子店が

左から中川ひろたか、新沢としひこ、増田裕子、平田明子。
みんな、りんごの木に関わっていた保育者たちである。

ケロポンズ

1999年6月に結成。ケロこと増田裕子とポンこと平田明子のスーパーデュオ。親子で楽しめる、笑いあり、歌あり、遊びあり、体操あり、ミュージックパネルあり、なんでもあり〜のステージを全国各地でくりひろげ、その面白さは宇宙的!と評判。その他、保育雑誌などにオリジナルの遊びや体操を執筆、保育者対象のセミナーに出演、絵本や紙芝居を創作、など広く活動。主な作品にCD「エビカニクス」「プリティケロポンズ」、本「ケロポンズのあそびネタ」「うたってあそぼうケロポンズ」など多数。2003年12月には初のラブソングCD「キミノエガオ」も発売。2007年には、人形アニメ「おやすみ!くまちゃん」の日本語吹き替えに挑戦、2008年4月からはNHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」にあそび歌やあそびを提供、2009年3月よりBS日テレ「それいけ!アンパンマンくらぶ」に出演、など活動の幅を広げている。

＊カエルちゃんオフィス　http://www.kaeruchan.net

誕生した。ちなみに、この不思議なバンド名は福尾の生家の屋号だった。

じつは、このトラや帽子店も、りんごの木と縁が深かった。そもそも中川は、りんごの木の創設メンバーのひとりだったのである。中川は一九五四年生まれ。大学を中退して保育園に就職した。まだ男性保育士が認められる前年で、翌年に認可となるや中川は試験に通って男性保育士一期生となった。そんな中川は保育のかたわら、遊び歌と絵本の創作に才を発揮し、ギターの弾き語りの遊び歌というジャンルも切り開いていった。

そんな中川がりんごの木に在籍したのは創設の八二年から八八年までだったが、後半の一年あまり九歳若い新沢としひこと過ごした。新沢はシンガー・ソングライターでもあり、とりわけ作詞の才能が光った。こうして作詞の新沢、作曲の中川というコンビが生まれ、トラや帽子店のレパートリーとなった。「世界中のこどもたちが」「ともだちになるために」は小学校の教材にもなった。ケロポンズもレパートリーにしている「にじ」もふたりによる曲だ。

一方の福尾は保育士の経験はなく、りんごの木との縁が濃いわけではなかった。だが、幼い頃から子ども会のリーダーで、高校を卒業した後は地元である三島市役所に勤務しながら、遊び歌を創作し、子どもを中心に据えた地域活動を支援、指南していった。中川より一歳若い福尾は多芸で、遊び歌の合間にけん玉、曲独楽、果ては南京珠すだれ、玩具楽器をステージに持ち込み巧み操って見せた。大道芸人的な愛すべき道化師である。

「中川さんの歌、野歩さんの遊び歌、わたしのパネルシアターが三本柱でした」

と振り返る増田は、トラや帽子店の結成から一年あまりたつと幼稚園教諭を辞めた。

@

平田はトラや帽子店を初めて観たときの衝撃をこういう。

「子ども向けの音楽って、子どもが喜んでいるのを見て、ああうちの子も喜んでいると親も喜ぶのが普通ですよね。トラや帽子店は全然ちがって、お母さんもお父さんも笑って椅子から転げ落ち、それを見て子どもが笑ってるわ。何だこれ！　と思って大興奮。それからはもう寝ても覚めてもトラや。秋には新潟までひとりで追い掛け、大学卒業の翌年三月には友だちと企画して、トラやを広島に呼んでコンサートをしてもらったんです」

この厚みを持ったバンド、トラや帽子店に惚れ込んだ平田はどうなったか？　大学卒業は決まっていたが、その先は真っ白だったのである。そんな彼女に「東京に来ちゃえば」といったのは中川だった。平田たちが企画した広島でのコンサートの後のことだった。

背中を押された。目的は定まらなかったが、平田は寝袋ひとつもっただけで上京し、同郷の友人と安アパートで共同生活を始めた。バイトで食いつないでの自分探し。ネパールを放浪したりもして一年が過ぎようというとき、トラや帽子店の周辺から、「りんごの木で働いてみないか」との声が聞こえてきた。

「幼稚園や保育園の道は向かないかなと思っていたんです。子どもとうまくつき合える自信もなくて。だから断るつもりで電話をしたんです。そうしたら柴田さんが〝あらっ、やだ。別に何もしなくていいのよ。子どもと遊んでくれればいいの〟というんです。〝それなら行きます〟と答えちゃいました」

こうして柴田のもとに向かった平田は、子どもたちの中で弾けた。台風の日に一緒に公園に繰り出し、長靴をバケツ代わりにして、ずぶ濡れなって遊び、帰り際には天然のシャワーでシャンプーするようなつき合い方だった。その一方、トラや帽子店に請われれば時間をやり繰りしてコンサートを手伝った。増田のパネルシアターの際、ピアノの伴奏を受け持ったのだ。

だが、次第にトラや帽子店は行き詰まっていった。最大の理由は人気だ。人気が行き詰まりの原因とは皮肉だが、口コミのようにして広がった人気は強固で、彼らは多い年だと年間一二〇回もコンサートを行なったのである。増田はいう。

「三日に一回はコンサートをやることになって、サラリーマン化しちゃったというか、同じことの繰り返しがつまらなくなっちゃったんです。機材も多くなり、コンサートはどんどん大きくなっちゃうし」

やがて結成から一一年めの一九九八年に休業宣言を出す。この後コンサートは開かなかったから、実質的な解散だったが、正式な解散宣言は二〇〇〇年のことだった。休業となってから三人は思い思いに次なる活動を模索した。そして、増田が白羽の矢を立てたのが平田で、ついにケロポンズの誕生である。

以来、一五年を過ぎてトラや帽子店のキャリアを超えた。

「つまんなくなったらやめようね、といっているんですが、つまなくなんないんです」

長続きの理由は活動を自然体で進めているところだろう。楽曲は次々に生まれていくようだ。

@

いま、彼女たちのコンサートはプロモーターが入ったり、幼稚園や保育園から呼ばれたりする場合も少なくないが、真骨頂は地域の有志がボランティアでコンサート実行委員会を作る形式である。実行委員会は主催者になって会場予約からチケットの販売、コンサートの当日は売上の精算を含めて運営のいっさいがっさい、さらには打ち上げの宴会まで仕切っていく。もちろん、マネージャーが当日までサポートするのだが、呼ぶほうは半年から一年がかりだ。

この、実行委員会方式というのは、トラや帽子店が始めたもので、解散してメンバーそれぞれが独自の活動をやり始めても、引き継がれたのである。まだ行動範囲が狭い子どもたちは、どうしたって地域社会と縁が深くなる。ある時期まで、子どもたちは家庭のある地域で育ち、また地域に育てられる。この真理に気がついて、トラや帽子店は実行委員会

方式でコンサートを行ない、その遺伝子をケロポンズも引き継いだのだ。増田はいう。

「最近は、残念なことに実行委員会方式は少なくなってきてしまいましたが、呼んでくださるなかには、トラや帽子店を呼ぶ実行委員会をやったという方々がいるんです。もう孫のいる世代。トラやで育った子どもたちがお子さんを持って、その子どもたちのためにおばあちゃん、それからおじいちゃんまで立ち上がって、中間の息子や娘を巻き込んでコンサートをやってくれるんです」

じつは、もう一〇年以上も前のことだが、わたしも実行委員会をやったことがある。呼んだのはケロポンズではなく、トラや帽子店を離れてソロ活動を始めた福尾野歩。彼とは取材を通じて知り合い、意気投合した。そして、ちょうど子育て真っ最中だったので、家族を連れて彼のコンサートに行くようになった。で、あるとき妻が「わたしも実行委員会をやる」といい始めたのだ。

妻がやるとなれば、わたしも協力しないわけにはいかない。そうはいっても、パフォーマーとは私的な関係もある。何よりわたしは音痴で踊りとなれば幼稚園以来のコンプレックスを持っている。福尾野歩のコンサートは、お父さんたちをステージに上げ、踊らせるのである。さらに実行委員もステージに上げられることが多く、巧みにいじられ笑いものにさせられる。人にも増してリズム感のないわたしは、無様に笑われるのが目に見えていた。

しかし、妻は本当にやってしまった。妻が中心になって組織した実行委員会は、同学年の子どもを持つお母さんたちが中心だった。そういうお母さんグループに入るのはハードルが高かった。いよいよ実行委員会が動き出して定期的な会合を持つようになり、出席をしぶっていると、「いい出しっぺのあたしがダンナを連れて行かなくてどうするの。夫婦で来てねっていっちゃったんだから！」と妻がいう。もう、引っ込めなかった。

結局、名乗りを挙げてからコンサートまで一〇カ月ほどかかった。いつの間にか実行委員会は、同学区内のふたつの幼稚園を巻き込んでいて、その園長先生から若い先生まで加わっていた。そんな作戦と主にお母さんたちの草の根的ながんばりで、当日は三〇〇人収容の会場は満席となった。そして案の定、わたしは公演中にステージに上げられ、予測した通り無様を曝して笑いものになった。ただ、これは予想外のことだったが、他家の子どもたちにも笑われるのは案外気持ちよかったのである。それから、地域のお父さんたちと子どもたちのことを考えたことは大きかった。仕事の場で子育て話になることはあったが、同じ職域で暮らす男たちの子育て観は似てくると思った。と同時に職域が異なれば、これほど子育て観もちがうのかと驚かされ、ちがう考えが集まるなかで妥協案を探していくのが地域なんだと思った。当たり前のことだが、頭でわかるのと肌で知るのとは話がちがう。脳みそから爪の先までに行き渡るよう、叩き込まれた感じであった。

@

あれからはずいぶん日がたった。

「最近は育メンも多くて、腰が引けないお父さんも少なくないですよ」

と平田は振り返る。それを聞きながら隣で増田が思い出したように笑う。

「でも、やっぱり腰が引けてるお父さんはまだまだいるわねぇ」

今年の四月に京都大学の総長に就任した山際寿一はゴリラ研究の第一人者であり家族論の大家だ。そんな山際に『父という余分なもの』（新書館）という著書がある。詳細は省くが、余分なものと切り捨てているのではなく、余分なものという重要な役割を説いているのである。その言説に、わたしは大いに納得させられた。あのコンサートの実行委員会のときも、その前後の家庭内でのわたしの立ち位置も、明らかに余分なものであった。

育メンが増えたとはいえ、やはり、子どもの小さいうちは女性がやることのほうが多い。家庭の延長である地域活動も女性が中心になるケースが多いと思う。いま思い返すと、あのコンサートの後から子育てや地域活動に加わっていくハードルが、わたしのなかで低くなったような気がする。

柴田愛子の言葉を借りると、子育てではなく「子育ち」。他家の子どもたちも含めた子育ち環境づくりに、微力ながら寄与できたという気持ちがある。ほのかであやふやながら自信が持てたのは、自分の子どもたちと向き合い続けるのに大いに役立った気がする。まだ子どもたちが親と近しい位置に立つ年代に、実行委員会を組織して自分たちでケロポンズを呼ぶ。苦労はするが、とくにお父さんが、余分なものとしての役割を実感する貴重な体験になると思う。

藍野裕之（あいの・ひろゆき）
昭和37年、東京都生まれ、法政大学卒業後、現代美術ギャラリー運営に参加。その後、工芸や芸能、博物学や自然科学などの執筆活動を雑誌などで展開。主な著書に評伝「梅棹忠夫・未知への限りない情熱」（山と溪谷社刊）のほか、永六輔氏との親交も深く「永六輔　職人と語る」、「永六輔　芸人と遊ぶ」（共著・小学館刊）のほか「出雲の民窯　出西窯」（ダイヤモンド社刊）、「ずっと使いたい和の生活道具」（地球丸刊）など多数。